

《この方はどなたなのだろう？》

コムニオーネ・エ・リベラツィオーネの大学生と一般人の年度始めの日に合わせて

Mediolanum Forum, Assago (Milano), 2019年9月28日

フリアン・カロン

キリストにとらえられるような心の貧しさを聖霊に願いましょう。

Discendi, Santo Spirito

哲学者であり精神分析医であるウンベルト・ガリンベルティ氏への最近のインタビューで《もっとも件数の多い苦悩はどのようなものか？》と質問したところ《ニヒリズムによるものだ。若者は健全ではないのに、その理由さえ理解していない。目的が欠けているのだ。彼らにとって未来は期待ではなく脅威に変わったのだ》。さらに《1979年に精神分析医として働き始めた時、問題となっていたのは感情的、感傷的、性的背景によるものがほとんどだった。今は意味のなさが問題だ》。(U.Galimberti, 《A 18 anni via da casa: ci vuole un servizio civile di 12 mesi》(《18歳で家を出る：12か月間の奉仕活動が必要》、S. ロレンゼット氏によるインタビュー、*Corriere della Sera* 紙、2019年9月15日)

これらの主張は、わたしたち一人一人がどのような挑発的な現実に向かっているかを明らかにしていると思われる。近日採り上げられた死期の問題のように、個人的にも社会的にも日常的にわたしたちに押し寄せてくる。非常に高い危険性のため侮ることはできない。この状況を軽視しようとするどんな試みも結局はその重大さを裏付けることにしかならない。

この挑発には最上の制度・組織についての話やモラリズム、あるいは感情では答えることはできず、成り行きに任せるようなものだ。ここで究極に要求されるのは、一人一人が生きるということにおいてどのような経験をしているかだ。ガリンベルティ師ご自身は《存在の意味は何か。》という問いに対して《ギリシア人が適度な尺度と呼んでいた制限倫理に求める必要があると思う。》とお答えになったことから問題をよく理解しておられるようだ。各自、この答えが《意味のなさ》を埋められるか、彼自身が暴露したニヒリズムに対抗できるかを確かめることができるだろう。

このような答えがウエルベックのような作家を満足させるかどうか分からない。ベルナール・アンリ・レヴィに宛てた公文書で《愛されたいという望みが常に増すと感じているのを認めるのはつらいものだ。当然このような夢がつまらないものだという事は、少しばかり省察すれば毎回納得できる。なぜなら、人生・いのちには限りがあり、ゆるしは不可能なので。しかし、省察は何の役にも立たず望みは消えることなく、今も続いていると認めざるを得ない。》(F. Sinisi, 《Michel Houellebecq. “La vita è rara”》, *Tracce*, n. 6/2019, p. 65). ガリンベルティ同様、ウエルベックも人生・いのちの限界を感じているにもかかわらず、それは愛されたいという彼の望みをかき消すことはできないのだ。自分の省察ではそうした望みはつまらないと納得はするものの。

教皇フランシスコは最近《今日の男女の質問に耳を傾けることがどれだけ重要か！》と新福音宣教推進委員会(2019年9月21日)の参加者に話された。だが、多くの場合、同様のわたしたちの質問も置かれている文化的状況の中で損得勘定をするよう促すのだ。このような挑発に答えるためにドン・ジュッサーニは一つの道を示してくれた。それは経験だ。

1. 経験、すべてのことのキーワード

《真実への道は経験である》、今年の夏のテーマとして掲げたものだ。そしてわたしたちが体験をした今、《真実への道は経験であるというのは本当？》という問いに答えられるだろう。この数か月間、各自に起こったどんな出来事がそれを裏付けるだろうか？わたしたちが口にする事柄が実際の経験となるのを見ることできないなら、自分自身も他人も、それらが真実であるとは納得できないのだ。ドン・ジュッサーニが経験というものを執拗に主張する根本的な理由は、1996年に大学生たちに言っていたように、彼にとって《現実には経験において明らかになる》(*In cammino. 1992-1998*, Bur, Milano 2014, p. 311)からだ。よって《経験はすべてのことのキーワードである》(《宇宙の自意識》, Bur, Milano 2000, p.274)と強調するのだ。

結論として、カリスマを途中で失いたくないと思うなら、わたしたちは本物の経験をしているか否かを認識する必要があるのだ。《経験から出発しない人は》—ドン・ジュッサーニは繰り返す—《自分自身を騙し、自分自身と他の人を騙そうとしている》。そして続ける。《人は経験以外からは出発できない》、なぜなら経験は《現実が浮き彫りになる場だから [...] ある特定の顔において、特定の側面において、ある特定の捉え方において》(ivi)。ウエルベックのように猛烈なニヒリストが、このことを自分の葛藤の中で証していることに感動する。自分の省察に従えば、愛されたいという望みはつまらないものなのだが、その省察は反論の余地を残さないほど、彼の中にはっきり現れる判断に対して抵抗できないということだ。《望みは消えることなく、今も続いていると認めざるを得ない》と。経験するとはこの判断なのだ。何もその望みを抑えられず、何もその望みを満たすことができないのだ。

このことによって、ドン・ジュッサーニが宗教心の第一章から示している方法の重要性が再び明らかになる。つまり、経験から出発することが唯一自分自身と現実を知り、物事が実際どのようなになっているかを理解するのを可能にするのだ。そして、それは外界、社会のメンタリティからの影響や、あるいは自分自身の刹那的な利益のためにわたしたちが何度も陥るイメージ、枠、矮小化への隷属状態から解放する唯一の可能性だ。

だが経験とは何か？《確かに、経験とは、何かを「やってみること」なのであるが、それよりもまず、経験したことに下される判断が重要なのである。「人間である第1の特徴は、物事に対して意識をもっていることである [...] だから経験とは、経験したことの意味の理解を伴うのである》(ルイジ・ジュッサーニ、宗教心、ドンボスコ社、p.18)。したがって、真実への道が経験であると言えるのは、わたしたちが体験することと、わたしたちを成している要求とを意識的に照合する時にのみ言えるのだ。最終的には、経験を体験すること、感情的なもの、より消滅しやすい側面に矮小化し続けるなら、マントラのように決まり文句を繰り返しても意味がない。キリスト教の経験自体も、キリストの出来事自体も多くの場合こうした事態に陥る。だから、ドン・ジュッサーニは自分が《経験》という言葉を使う意図をわたしたちによく理解させることを重視するのだ。

《経験は、自然が人間の意識の向上と成長を支えるために備えた基本的な方法である。よって、人間が“成長した”と気づかないなら経験とは言えない[起こることを意識するのは機械的なことではない]だが、真に成長するためには人間は自分とは異なるもの、客観的なもの、“出会う”何かに刺激され、あるいは手助けされる必要がある》(L.Giussani、真実への道は経験である、リッツォーリ、ミラノ

2006, p.155)。

認知の全領域において有効なこの方法は、「神秘」を知ることにおいても適応され得るのだ。《真の、客観的な経験を通して人々はこの世における神の存在に気づいたのである》続けて、ドン・ジュッサーニは《聖ヨハネは “この命は現れました。わたしたちは見ました。そして証しをします。御父とともにあり、わたしたちに現れた永遠の命をあなた方に告げ知らせます。” と初代キリスト者に書いている。真の、客観的な経験を通して [二回繰り返す]、「教会」におけるキリストの存在は意識を持った人間の歴史に正体を現すのである。キリスト教の共同体との出会いも、その共同体が伝えるメッセージの確認も […] 真の、客観的な [もう一度！ドン・ジュッサーニは繰り返す] 経験である》と言う。(同上 p.156) ドン・ジュッサーニはわたしたちが話していることが《真で客観的な経験》の対象であると三度繰り返している。《真》、つまり具体的な、他のどんな経験にも劣ることのないものだ。そして《客観的》。つまり、わたしがつくり出すものではなく、わたしの外部にある何かに遭遇することだからだ。

20 日ほど前、ブラジルのバイア州のサルバドルで友人が話してくれたこと。《わたしは幼いころからプロテスタントの環境で育ち、少し大きくなってから洗礼を授かりましたが、彼らと同じように生きるのがいやになったので、そこを離れ、1年ほど宗教について議論したり、からかったりもしました。宗教に反する理性や科学の論説の場を求めました。けれども、自分の人生には満足できませんでした。何か違うものがほしかったのですが、それが何かわかりませんでした。他の宗教について調べ始めたのですが、カトリック教会は間違っていると思っていたのでいつも除いていました。幼なじみの友達が町内の若者の仮装パーティーに誘ってくれるまでは、宗教とはまったく関係がなかったのでそこに行きました。けれどもパーティーから帰って考え始めたことは、今まで色々なものを読んだのになぜカトリック教会だけはいつも無視してきたのだろうか、と。この自分の問いに真剣に向き合うことにしました。カトリック教会について読み始めただけでなく、自分の理性と心に一致する答えを探し始めました。そしてカトリック教会について読んでいたものは心に一致するように感じ始めたのです。自分にとって意味があったのです。それで改宗することに決め、カトリック教会で洗礼を受け、初聖体も堅信も受けました。幸せでしたが、より大きなものを見つけたかったのです。居場所が欲しかったのです。色々な所へ行ってみましたが、とても不安になることが多かったです。反教皇勢力を恐れて常に警戒しているような、とても閉じた教会のイメージを受けました。このような状況であるなら、カトリックである意味はどこにあるのかと自問しました。そのため探求を続けていたら、“フランシスコが治療だと思えないなら、それは病気を理解していないからだ” (J. Carrón, intervista di John L. Allen e Ines San Martin, *CruXnow.com*, 21 giugno 2017)と主張するカロンのインタビューが目にとまりました。異なった見方だったので興味深いと思いました。他の所での結論はいつも“わたしたちは主イエス・キリストを信じています”でしたが、カロンの言い方からは机上の空論ではなく生きた希望でした。わたしの注意を引いたインタビューの箇所を覚えています。それは結婚していないカップルの何組かがCLの家族のところに入りするようになったという話でした。その家族は教会の中での彼らの立場については何も言わなかったけれども、彼らは自分たちの意志で結婚することに決めたということでした。その家族に出会い、見たものによって決心したのです。これは自分にとって興味深い、これを探していたのだと自分に言いました。こうしてカロンをフォローし始めました。彼が誰なのか、インタビューの人々が誰なのか知りた

かったのです。そして、ここサルバドルでCLの人に出会いました。何か異なるもの、わたしの心に一致する何かを見出したから留まったのです。この場を見つけていなかったら教会に留まっていなかったかもしれません。現実に対する見方が新しくなり、自分自身に対してもより大きな愛をもって見るようになりました。自分の心の要求への答えをこのように熱心に探していた人が、まさに自身の経験に対する誠実さによって、答えを見つけるまで止まらなかったことに感動した。自分を魅了し、自分を成している期待に答える現実—歴史的で、客観的な教会の具体的な一つの顔—を見出すまで立ち止まらなかったことに。

ここまで言われたことを念頭において考えてみると、ドン・ジュッサーニがある時《わたしの人生で伝えてきたもっとも重要なことは、神が、神秘が人間にとって経験の対象となる方法で現れ、ご自分を伝えられたということである。神秘はわたしたちの経験の対象ともなる。時間と空間の中でのしと重なってわたしたちの経験の対象となる》(宇宙の…pp.164-165)と告白した理由が理解できる。

これは決定的だ。《神は人間に認められるために人間の人生に人として、人間のかたちをとって入り込まれた。そのため人の思考、想像力と愛情はまるで「彼」に“釘づけ”にされ、引き付けられたかのようにになった》(L. Giussani-S. Alberto-J. Prades, *Generare tracce nella storia del mondo*, Bur, Milano 2019, p. 36)。これが歴史における神の存在の試金石だ。つまり、キリストに《釘づけ》になり、引き付けられるというのは、わたしたちの人生・いのちにおいて彼が働いているという意味なのだ。

福音はこのことの絶大な記録である。《さて、ファリサイ派のある人が、イエスと食事をともにしたいと申し出た。そこで、イエスはそのファリサイ派の人の家に入って、食卓にお着きになった。ところで、その町には、一人の罪深い女がいた。彼女は、イエスがファリサイ派の人の家で食卓に着いておられることを知ると、香油の入った小さな壺を持って来て、泣きながらイエスの後ろから、その足元に近寄り、涙でイエスの足をぬらし始め、自分の髪の毛でふき、その足に接吻して、香油を塗った。ところが、イエスを招いたファリサイ派の人はこれを見て、心の中で言った、「もし、この人が預言者なら、自分に触れている女が誰か、またどんな女であるか分かるはずだ。あれは罪深い女なのだ」。そこで、イエスはその人に、「シモン、あなたに言いたいことがある」と仰せになると、シモンは、「先生、おっしゃってください」と言った。すると、イエスは仰せになった、「二人の人が、ある金貸しから金を借りていた。一人には五百デナリオン、もう一人には五十デナリオンの負債があった。ところが、二人とも返す金がなかったので、貸し主は二人の負債を帳消しにしてやった。この二人のうち、どちらがその人をより多く愛するだろうか」。シモンは、「多く帳消しにしてもらった方だと思います」と答えた。イエスは、「その判断は正しい」と仰せになった。それから、イエスは女のほうを振り向き、シモンに仰せになった、「この女をご覧なさい。わたしが家に入って来ても、あなたは足を洗う水さえくれなかったが、彼女は涙でわたしの足をぬらし、自分の髪の毛でふいてくれた。あなたはわたしに接吻しなかったが、彼女はわたしが入って来た時から、わたしの足に接吻してやまなかった。あなたはわたしの頭に香油を塗ってくれなかったが、彼女はわたしの足に香油を塗ってくれた。だから、あなたに言うておく。彼女の多くの罪が赦されたのは、彼女が多くの愛を示したことで分かる。少しでも赦される者は、少ししか愛さない」。そして、イエスは女に、「あなたの罪は赦されている」と仰せになった。そこで同席していた人々は、「罪をも赦すこの人は、いったい何者だろう」と心の中で言い始めた。しかし、イエスは女に仰せになった、「あなたの信仰があなたを救った。安心していきなさい》(ルカ 7,36-50)。これはまったくキリストに引き付けられた女性だ。

これがわたしたちにとって、そして世の中にとって重大な問題だ。「彼」に引き付けられていないなら、現にわたしたちは浮遊機雷のように、自分たちの思いや反応、考え方、自分のものごとに対応するやり方に左右されてしまう。一言で言うと無に左右されるのだ。全身全霊を引き付ける人に遭遇すると、その違いは一目瞭然だ。これが信仰だ。だから、イエスは《あなたの信仰があなたを救った》と言ったのだ。

2. 《人の子が来るとき、地上に信仰が見出されるであろうか》

二つ目のポイント。この出来事が起こり、人間に認められるために神が人として歴史に入り込んだなら、唯一の問題は、ドン・ジュッサーニが今年の「年度始めの日」で投げかけたイエスの問いだ。《人の子が来るとき、地上に信仰が見出されるであろうか》(ルカ 18,8)。問題は「彼」を話題にしているかとか、集まりや活動をしているかとかではなく、その時わたしたちのうちに「彼」に引き付けられている者がまだいるかどうか、無に陥らないために全身全霊を「彼」に引き付けられている者がまだいるかどうかなのだ。これを可能にする条件は、フラテルニタの黙想会の第二レッスンにあったように、歴史に入り込んだあの「存在」が存在し続けることだ。事実「彼」を存在させるのはわたしたちの努力では不可能だ。「彼」が歴史に留まることを保証するのは《わたしは代の終わりまで、いつもあなた方とともにいる》(マタイ 28,20) と言っているように、「彼」自身なのだ。よって、わたしたちの真の問題は、現在において「彼」を捕えられるよう心が開いているかである。バイアのサルバドルの友人のように起こっていることを見過ごさないことだ。つまり、「彼」だ、「彼」が起こっている。わたしたちが起こることの中に「彼」を捕え、それを語り伝えることは当然のことではない。

ドン・ジュッサーニが今年の「年度始め」で言っていたように、問題はある組織に属することではない。組織に属していても「彼」を捕えていないこともあるからだ。ニヒリズムや意味のなさを解決するのは組織ではない。信仰だけだ。だから、ドン・ジュッサーニは《わたしたちが探し求めているのは信仰だ。わたしたちが深く知りたいものは信仰だ。わたしたちが生き抜きたいと望むのは信仰なのだ》(«Vivente è un presente!», *Tracce*, n. 9/2018, p. 4) と言っている。なぜなら、これ以外のものはわたしたちを引き付けることも、ニヒリズムから救い出すこともできないからだ。

だが、今日においてどのように可能なのか。初めの時とまったく同じように、ものごとに驚く心の開きと心の貧しさをわたしたちに求める意味に富んだ存在に遭遇することによって可能なのだ。まさに「彼」が再び起こることによって、わたしたちの心は貧しくなり、驚くこと、捕えられることに心を開くのだ。なぜなら、《驚異を欠くなら、わたしたちは壮大な響きに耳を傾けようとしない》(come dice Heschel, citato nel capitolo X de *Il senso religioso*, nel brano scelto come titolo del Meeting 2020)から、起こっていることに耳を傾けないのだ。

だからドン・ジュッサーニは、根源と一体化することを勧めるのだ。《(使徒たちは) どのようにして信じるようになったのだろうか》と。わたしたちが根源と一体化するようにドン・ジュッサーニはこの問いを繰り返すのだ。聖なる書に記されている通り、これが原理であり、起こったことの本形だから、これは歩みのどの時点においても変わらない方法なのだ。ドン・ジュッサーニは《信じたのは、キリストが話すことを聞いたからでも、キリストがあのような奇跡を起こしたからでも、キリストが預言者たちを引用したからでも、キリストが死者を復活させたからでもないのだ。何人もの人々、大多数の人々はキリストが話すのを聞き、奇跡を起こすのを見たはずだ。にもかかわらず、出来事はその人たちに起

こらなかつたのだ。奇跡や言葉は出来事に関連するもの、出来事の断片、要因に過ぎないのだ。しかし、出来事はこれらとはまったく異なるものであり、その異例さが奇跡や言葉に意味を与えたのだ》(L. Giussani, «Vivente è un presente!», cit., p. 8)と答えている。

だとすれば、なぜ信じたのだろうか？《キリストが見せた姿のゆえに人々は信じたのだ。[...] 存在する者のゆえに信じたのだ。手応えのない鈍才な、顔（表情）のない存在ではなく、輪郭のはっきりした存在、豊かな言葉、つまり勧めに富んだ存在だったのだ》。いつも言っているように《勧めを含んでいるすべての存在が意味深いということではない》(ivi)。勧めは多く聞こえてくるが、わたしたちを引き付け得るのはどれなのか。

勧めに富んだ存在を見出したことが明らかになるのはどんな時だろう？それは自分が引き付けられている、虜になっていると気づく時だ。罪深い女のように、初めのように。この状態は《根底的な新しさ》を前にした時にしか起こらないのだ。ドン・ジュッサーニは《“予想外”、“意外”》という言葉で表現している。《以前はなかつたのに今ある、そこにあるもの。[...] 存在し得ないはずなのにここにあるものだ。》ある勧めが意味に富んでいるのは《意味を伝える人を包含している》場合、伝える意味に完全に包含されている人と重なる場合だ。《過去から生じるものに矮小化できない》(ibidem, pp.8-10)存在なのだ。それは、予想外、意外な何かプラスアルファを有する存在。存在しなかつたのに、ここにいる。それが今起こらないなら、今わたしたちを驚かせないなら、キリスト教はわたしたちにとって過去のものとなったことを意味する。ところが《‘生きている’ というのは存在しているということ！》、そこいるのだ。存在するはずがないのに、そこにいる。そのしるしは、ある種の存在に遭遇すると一わたしが作り出したものではない現実的で、客観的でわたしの外部にある一わたしのうちに、わたしたちのうちに《この方はどういう方だろう？》(マタイ 8,27) という問いが生じることだ。

あの問いは生じ続けている何かを描いている。今日、わたしたちを通して。わたしたちに遭遇する人々のことを思っている。わたしたちが一緒にいる時、あるいは一人でいる時、様々な状況の中で一共同体のバカンスの間、職場や大学で起こった出会いについてわたしが聞いた話から一異なる生き方を見て、受け入れたる恵みによって生じる新しい人を見て《それにしてもあなたは、あなた方はどういう人なの？ どうしてそうなの？》と問うのだ。二千年過ぎた後にも、この世に同じ問いが響くのだ。

けれども、この問いはどのように生まれるのか？この問いは付帯現象、わたしたちではない別の何かの兆候なのだ。問題の核心はまさにここにある。つまり、誰かがこのような問いかけをすることが何を意味するかを捉えることだ。時折、わたしたちは啞然とし鈍感になって《この人たちは何を見てこのような質問をするのだろうか》と自問しないことがある。その人たちは、《プラスアルファ》、《何か》を有する存在を目の前にしたのだ。その人にある自然の資質や努力や良い意志を超えるもの、以前見たことがないもの（《このような人は見たことがない！》）を。さもなければ、こうした問いは生じるはずがない。その問いはわたしたちのうちに、わたしたちのような者のうちに働く、わたしたちを超える「存在」を裏付けるのだ（ドン・ジュッサーニは、フラテルニタの黙想で言及した文章で《「何か」の中の何か》という表現をしている）。この問いは、心の渇きへの答えである生きたキリストという“答えそのもの”を目の当たりにした驚きから生じるのだ。つまり、起こるキリストの異例さを前にして生じる。たとえそのものであると認めるに至っていないにしても。

もしキリストが存在していなければ一人間を介するしるしを通して一驚きも、問いも生じない。問いとして不意に出現する驚きは、生きた存在を前にせずには生じ得ないからだ。

だが、わたしたちも貧しい、開いた心で、人間の望みに見合った存在が起こるのを待ち望む物乞いのように受け入れる心構えでいる必要がある。事実、わたしたちはそのような異例な人間を前にして盲目で在り得る。つまり、その異例さが起こっても、わたしたちには見えず、驚くこともなく、どんな問いも生じないこともあり得るのだ。

だから、その存在に浸っていながら、問いを生じさせる驚きを容易にする心を育てるところか、多くの場合《プッ、そんなこと、もう分かっているよ!》と言ってしまうのだ。このような発言を聞くと愕然とする。驚きのかけらも見られない! 問いが生じるなど、とんでもない! だから、《この方はどなたなのだろう?》という問いだけでも家に持って帰られるなら、今日ここに来たことは無意味ではないだろう。

わたしたちは毎日確認することができる。何度、ある存在に対して驚き、その虜になったか。逆に“その存在を話題にし”言葉を繰り返したり、起こった事柄—どんなに目を見張るものであろうと—を語ったりするにもかかわらず、自分の目の前で起こる《プラスアルファ》に驚きを見せることも問いが生じることもない状態が何度あったか。このような状態はわたしたちを懐疑的にしてしまう。もはや正しいことを知るだけ—ガリンベルティが見出した挑発がそれを許さない—では、あるいは正しい言葉を語るだけでは充分ではないからだ。そして《人の子が来るとき》、わたしたちのうちにその存在に驚く人を一人も見出さないだろう。変えられた人間性の肉において「彼」を認める人を。〇〇会に属し続けてもだ。なぜなら、〇〇会ではなく、信仰に関わることだからだ。そして信仰とは、二千年前と同じく今も起こり続けている、今ここに存在する「存在」を認めること以外の何ものでもない。

キリストは過去に閉じこもっていない。その出来事は—わたしたち一人一人を魅了した出来事だ。さもなければ誰一人ここにいるはずがない—博物館に保管されているわけではなく（教皇フランシスコがサン・ピエトロ広場で言われたのを覚えている?）、過ぎて行った時間の思い出に属しているのでもない。今ここに、今ここに肉においている! 過去は、今日信仰を興味深いものにするには十分ではない。初めの頃、わたしたち一人一人にとってそうであったように、現在において何かが起こる必要があったのだ。

《一行はカファルナウムに着いた。早速、イエスは安息日に会堂に入って教えられたが、人々はその教えに非常に驚いた。イエスが律法学者のようにではなく、権威ある者のように教えられたからである。その時、汚れた霊に憑かれた人がその会堂に居合わせて、叫んで言った。「ナザレのイエス、わたしをどうしようというのですか。あなたはわたしたちを滅ぼすために来られたのですか。わたしは、あなたがどなたであるかを知っています。神の聖なる方です」。イエスが叱って、「黙れ、この人から出ていけ」と仰せになると、汚れた霊はその人をけいれんさせ、大声をあげて出ていった。人々はみな驚いて言い合った。「これはどうしたことだ。実に権威のある新しい教えではないか。この人が命令すれば、汚れた霊でさえ従う」。こうして瞬く間に、イエスの評判はガリラヤ付近の全地域に広まった》（マルコ 1,21-28）。聖書についての話はよく聞いていたが、驚くことはなかった。違いは権威を目の当たりにしたことだ。その人の発する言葉の新しさによって《この方はどなたなのだろう?》という問いが生じたのだ。

この権威が決定的であることはドン・ジュッサーニ自身が証している。耳を傾けよう!

ルイジ・ジュッサーニとメモレス・ドミニ会の会員との対話より
(ミラノ、1991年9月29日)

2019年9月28日の年度始めの日におけるメモレス・ドミニ会の資料館に保管されている録音資料の再生の文字化。《歓喜、喜びと大胆さ。生まれ出ていなければ、誰も生むことはできない》, *Tracce-Litterae communionis*, n. 6/1997

ルイジ ジュッサーニ

民の現実において民としてもっとも重要な要因は何だろうか。君たちが今朝黙想したように、仲間の現実において仲間としてもっとも重要な要因は何だろうか。民としての現実において、わたしたちが呼ばれたような民にとって、わたしたちが参加している仲間にとって、預言の場にとって、すべてが神であると叫ぶ場にとって、宗教心の本物の場にとってもっとも重要な要因は何だろうか。

民の現実において民として、仲間の現実において仲間としてもっとも重要な要因は、わたしたちが《権威》と呼ぶものである。わたしたちの中にある権威のイメージを完全に、最後のかけらまで壊す必要がある。それは、権威あるいは指導者を“ロボット”のように見なし、まるで司令塔に閉じこもって、そこから命令を下し、指示を出して物事の流れを決定する人間、人間たちのようなイメージである。

権威、指導者、それは権力とはまったく反対の存在であり、権力の意味合いはかけらも持たない。よって、神の民における権威の意味はどのレベルにおいても恐れはまったく存在しない。なぜなら、権力は恐れに呼応するものであり、人は恐れから自由になるためには権力を無視しなければならないのである。

権威とは何だろうか。一つの定義を与える。[権威は] 場—なぜなら君も一つの場、そうだろう？人は一つの場だから—キリストの勧めが本物であるということがより透明で簡素な場である。預言の戦いと預言の確認、わたしたちの勧め、キリストの勧めが心の感受性にとって何であるか…権威はキリストの勧めが本物であり、つまり、感受性への、心の要求への答えである(宗教心への、心の要求によって与えられる宗教心、目の前にある答えに反応する)ことを確かめるために主張し、それを確認する戦いの場である。より透明で簡素で—だから恐れを抱かせない—より平穏な場である。権威は、感受性、心の要求とキリストのメッセージによって与えられる答えとを照らし合わせ、確認することがより透明で簡素であるためより平穏な場である。

パゾリーニは、最近何度か引用してきた彼の著書の中で、人間は教育されていない、若者は教育されていないと言っている。要するに、誰かが教育するというのは、その人の存在そのものに教育されるということであってその説教によるものではないのである。

権威は、心の要求とキリストが与える答えの繋がりがより透明で、より簡素で、より平穏な場である。この事実は、権威が一人の存在であり、説教を発するものではないことを示している。

説教もその存在を成すものではあるが、単にその人を写し出すものとしてなのである。要するに権威とは、その人を見ることによって、キリストの言うことが心に一致するのだと、理解させる者のことである。このことによって民は導かれるのである。

二つ目のポイント。問題は従うことではない…問題は従うことだが、《従う》という言葉では十分に良く説明されていない。《子である》という言葉の方が意味をよりよく捉えている。権威の子なの

である。子は父親の切り株を受け継ぎ、父親から与えられた血筋によって成っており、父親に成されている。だから、完全にとらえられている。権威はわたしのすべてをとらえるのである。わたしを脅かす言葉でも、恐れを抱かせものでも、恐れるから“従う”のでもない。わたしをとらえるもの。つまり、《権威》という言葉は《父性》という言葉と同義語と考えることができる。つまり、生を与え、命を繋ぎ、ゲノムを伝える。血筋を引き継ぐのである。命の血筋というのはこの関わりによってとらえられ、変えられるわたしの自己である。

《権威》という言葉は、《父性》という言葉に相当し《自由》という言葉に繋がり、自由を生み出す。子であるというのは自由であること。事実、福音書には何度も《イエスはペトロに言った。王の息子が王への税や貢ぎ物を払う義務があるか？いや、それはしもべに関わることだ。なぜなら父の物は子の物であるからだ》と出てくる。

よって、《権威》が本物あるいは本物として感じられるのは、わたしの自由を解き放つ時である。わたしの個人としての意識と個人としての責任感を目覚めさせるのである。自己意識と個人的な責任感を。

だから、まさにわたしに指摘されたかのように、イエスが振り返り《あなた方はわたしを何者だと言うのか》と言われると、ペトロは《あなたはキリスト、生ける神の子です》と答えた。このキリストの問いかけは、ペトロに友人—最初は友人、知人だった—の視点から個人としての意識の責任、個人的な責任感を起こしたのである。自己の責任によってペトロは《あなたはキリスト、生ける神の子です》と答えたのである。キリストとの友情はあの瞬間に、突然、個人としての意識と責任によって明確になり、その答えを口にしたのである。

権威の場、権威である人との関わりは、個人としての意識と責任において自分自身が自由になったと感じないなら存在しない。

3つ目のポイント。では、権威がこのような自由の源であるなら、心地よい場となり、仲間全体を、民全体を心地よい場にするのである。どういう意味で？心地よい場となるのは、そこにキリストの勝利が見えるからである。その人においてキリストが勝利した、勝利している、納得させ変える場であることを、心の要求にどれほど一致するかを、誰かが見せて、証ししてくれるなら、見ている人にそれが起こると理解できるなら、仲間の中でもそれが起こることを理解し始めるのである。わたしがどんな者であろうと、どんな精神状態であろうと、前進していようとあまり進んでいなかろうと、わたしは心地よさに満たされるのである。《あなたの掟は喜びの泉である》。快いのである。キリストが勝利するから。

権威はキリストが勝利するというのが明確になる場である。キリストが勝利するというのはどういう意味だろうか。外観においても、目に見えてキリストが答えると、説得力のある方法で、預言的に心の要求に一致することである。わたしにも起こるだろうと。それは不可能のように思えるが。権威であるあの人にとっても不可能だったことが可能になり、事実となったのである。キリストは勝利する。

従って、権威は父性の場である。新しいいのちがより透明、より透明で明らかな場である。新しいいのちとは、キリストが心の答えとなるよう人間は造られたから、キリストが心に答えるというものである。これが本当の権威である。だから、ファリサイ派の指導者ではなく、神殿の献金箱に小銭を入れる貧しい女性が権威となり得る。

父性に満ち、生を与えるこの権威は、より大きな自由の経験、個人としての意識と個人的な責任によって示される。そのため皆が離れて行っても、裏切ったとしても—最近の年度始めで、最初の年度始めでわたしが言及した素晴らしい箇所にあったように—皆が裏切ったとしても、わたしはあなたに《はい!》と答える。個人としての意識と責任。だから、権威は心地よい場であり、キリストが勝利するのを目の当たりにする場なのである。こうして、権威はその本物の任務を遂行するのである。なぜなら、民を高め、民全体および仲間全体はキリストが勝利する場であることを理解させるからである。

カロン

権威は民の現実においてもっとも重要な要因だ。権威なしでは民を生むことはできないからだ。だから、わたしたち一人一人は置かれている場でその存在を認めるよう呼ばれている。なぜなら、一今聞いたように—《ファリサイ派の指導者ではなく、神殿の献金箱に小銭を入れる貧しい女性が権威となり得る》。それは何によって分かるのか。権威とは《その人を見ることによって、キリストの言うことが心に一致するのだと、理解させる者のことである》。よってわたしたちが歩みのどの時点にしようとも、皆にとって慰めとなる。

ある日のスクオラ・ディ・コムニタで一人の女性が次のことを話してくれた。《昨年個人的な理由で運動から離れ、フラテルニタからも退会する選択をしました。あなた方は“じゃ、なぜここにいるの?”と自問するでしょう。昨年5月にとっても些細なことに見えるある事が起こりました。同僚とハッピーアワーに行こうとしていた時に追突されました。とてもひどい衝撃だったので病院に運ばれ、待ち時間にすばらしいことが起こったのです。そこで起こったことが今日わたしをここにいさせるのです。フラテルニタの黙想の冊子に強調したい箇所をマークしました。“これらすべてはどこから来るのか?どこからわたしたちのもとに来るかをよく理解すべきである。さもなければ、ここに戻る理由は何だろうか。生きたキリストから来るのだ”。次は“場”についての箇所です。夜中の二時ごろ医者が診に来てくれました。わたしは何か重大なことが起こったのかという思いに怯えていました。わたしが生涯忘れられないと思うのはあの医者まなざしです。人間性に溢れるまなざしでわたしは見つめられ、“わたしをそのような目で見るとあなたはどなたですか”と自問しました。その瞬間に“その人ではない。わたしの前には何か別のものを示している何かがいるという認識の仕方をわたしは今経験している”とひらめいたのです。追突によって優先治療室に入り、あのまなざしに“覆われて”出てきたのです。その後の数日は、あのまなざしとあの問いが頭から離れませんでした。そしてある時、友人たちの連絡先がほしくて運動の事務所を騒がせました。それは、あのようまなざしを以前見たことが、認めたことがあったからです。そして、あのまなざしを認める方法は運動の教育の中でしか習わなかったからです。わたしに起こったことは客観的な事実、現実的なものです。あの追突の後“何か変わったまなざしをしているよ。あなたはよりあなたになっている。何が起こったの?”と人々に言われました。わたしには説明できなかったので、再び運動を求め始めたのです。なぜ?出会ったものを失いたくなかったからです!認めたものが続いてほしく、その助けとなる唯一の場はスクオラ・ディ・コムニタだからです。そこでわたしは「彼」を認め、「彼」を生きるよう教育されるからです。

この人においてキリストは勝利している。《権威はわたしのすべてをとらえるのである》とドン・ジュッサーニは言っていた。包括的なのだ。わたしは、キリストがこのように誰か—誰であろうと—にお

いて勝利するというところに唾然とし言葉を失い、すべてを与えたいと望まずにいられない。そしてわたしにはすべてをとらえられることを妨げることはできないのだ。権威はわたしのすべてをとらえる。あなた方の一人が書いてくれたように。《わたしの人生は、この「存在」、ある「存在」を認めることから常に出発することです。このことにおいてしか生きる喜び、歓喜、生き甲斐は生じません。他のどんなものもわたしから引き出せないものを引き出し得る「存在」。キリストのみが、わたしから従順、愛情、他の何にも比べることのできない愛を引き出すことができるのです》。なぜこれが唯一ニヒリズムに打ち勝つことができるものなのかが分かるだろうか。

しかし、このすべてをとらえることは、逆にわたしを奴隷にするのではなく、完全に自由にするのだ。権威は《自由の源》、《わたしの自由を解き放つ》のだ。

《“この人は権威ある者のように教えられた”。だが権威とは誰なのか。このことについてダンテの天国の第三歌にすばらしく完璧な表現がある。“大いなる希願の的へ向け”と。一しるしの方へ向く。それがより望みに溢れる顔であるため、自分のうちにより望みへと駆り立てるのだ。一権威は“大いなる希願”に溢れ、わたしたちに“大いなる希願”を目覚めさせる新しい顔である》。ドン・ジュッサーニは《権威に出会った時にのみ、本物の歓喜がわたしたちのドアから染み入って、わたしたちの人格の敷居を超え始めるのだ。その新しい顔を見つめることによって、人は心が期待するものとの一致に気づき、喜びを見出すのだ。権威なしで喜びはない。“満足”あるいは“快感”はあるかもしれないが、自由、思考と心、まなざしと言葉の人間的な喜びはない》と続ける。(L'avvenimento cristiano, Bur, Milano 2003, pp. 16-17)

キリストに完全にとらえられている場合にのみ、罪深い女のようにリスクを負うことができる。彼女は皆のまなざしの前で、周りにいた人々の噂や意見、反応に左右されることなく、自分自身である自由を証した。どんな恐れにも怯むことなく、周りのメンタリティに妥協することもなかった。失うものは何もなかった。皆が彼女を罪人と見なしていたのだから、失うものがあるだろうか。だから、全身全霊をキリストにとらえられる大胆さがあった。奥まった自分の一室ではなく皆の前で。皆の反応の的になった。イエスも反応した。だが、「彼」が戸惑うことはない。彼女が誰なのかを知っている。「彼」の彼女へのまなざし、反応を通してその異例さがあらわになる。虚を突かれる思いだ。

このような自由は、今日、教育するには決定的なものだ。所有せず相手を慕うために距離を置いてキリストの存在を伝えることを可能にし、自己の中心に興味を目覚めさせ、引き付けるために、キリスト教を《純粹すぎて淡すぎる》—デ・リュバックが言っていたように—価値観に矮小化しないために、自分自身の人間性を凍結させない。(Il dramma dell'umanesimo ateo, vol. 2, in Id., Opera omnia, Jaca Book, Milano 1992, p. 59)

人が子となることを望むのはそのためだ。自分をとらえ、キリストが勝利している《血筋を引き継ぐ》ことを望むのだ。《命の血筋というのは、この関わりによってとらえられ、変えられるわたしの自己である》。子は自分がまとっている異例さを発散させる自由がある。この異例さは常に自分を生む他の者から受けているのだ。聖パウロが《実に、わたしたちは自分自身を宣べ伝えているのではなく、「主」であると宣べ伝えています》と言っているように。どのようにして宣べ伝えているのだろうか？《わたしたちは、イエスのためにこそあなた方に仕える者なのです。なぜなら、「闇の中から光が輝き

出るように」と命じられた神は、わたしたちの心のうちに輝いて、イエス・キリストの顔に輝く神の栄光を悟らせるように、光を与えてくださった方だからです。ところで、わたしたちは、このような宝を「土の器」の中に入れて持っています。この上なく優れた力は、神のものであって、わたしたちに由来するものではないことがわかるためです》（コロサイ24,5-7）

3. 今生まれ出していないなら、誰も生むことはできない

ドン・ジュッサーニの言葉で聞いたように、権威は現在における父性なのだ。

このことはわたしたち一人一人にとって特に決定的だ。《人は父と言える誰かがいないなら、その人も父、命の与え手となれない。[要注意！] [父が] “いた” と言っているのではなく、[現在において] 父と言える人が “いなければ” と言っているのだ。父と言える人がいなければ、出来事だとは言えないからである、[...] 生んでいないのだ。生むことは現在における行為なのだ》。(L. Giussani, «La gioia, la letizia e l'audacia. Nessuno genera, se non è generato», *Tracce*, n. 6/1997, pp. II, IV) これは距離をおいても分かることだ。父がいるのはどんな人か。今この瞬間に生まれ出ている人。わたしたちがある家族の家を訪ねる時に分かるように、子である人、その瞬間に生まれ出ている人とそうではない人。その違いは、生まれ出していない人は自分を守ろうとし、父に対して恐れを抱いている。

《他の人を前にする状態は不変なものであるが、父性の具現化としての不変な状態は現在において存在するものである。父がいるということが不変な状態であるのは、その歴史に属するからである。1954年にわたしがベルシェ高等学校ではなく、他の高等学校に入っていたらまったく違ったことになっていただろう。状態は不変であるが、生む—父性の興味深い点—ということは存在であり、現在のものである。よって、父抜きでは生む者にはなれない。父がいないなら、生まれ出していないなら》。それは《父がいない人は“情緒的な障害者”だからである。そして、このような情緒的な障害者にとって、以前父はいたが、現在にはいない。個人的な父性、自己を生み出す父性は。いや [...] 自己を生み出すのではなく、自己の行為を生み出す》(ibidem, p. IV).

よってドン・ジュッサーニは《今生まれ出していないなら、誰も生むことはできない。“生んでもらっていない” ならではなく、“今生まれ出していないなら” である。このような父性の観念は啓蒙主義的文化にもっとも攻撃されてきたもの》(ivi)だと締めくくる。多くの場合、そのメンタリティに属しているわたしたちの間でもそうである。

結果として今日において生み出す—親が子を、教師が生徒を一ためには、初めの頃のように再び始めるためには、このドラマチックな時代の歴史に貢献するためには、過去の思い出でだけでは十分ではなく、今存在する父性が必要なのだ。今日において生み出すためには、過去のものに矮小化されない、《プラスアルファ》を有する、意外な、予期せぬ、存在しなかったのにそこにいる、今存在する存在が必要なのだ。

最近、教皇フランシスコがミラノ宣教会の宣教師たちに《福音宣教というのは死んで復活したイエス・キリストを証することだ。「彼」が魅了するのだ。それゆえベネディクト十六世が述べられたように、教会は熱心な勧誘によってではなく、引き付けられることによって成長するのである》と言われた(*Discorso*

al Capitolo generale del Pime, 20 maggio 2019)。

だが、それはどこで起こるのか。どこで「彼」は引き付けるのか。「彼」はどこで魅了するのか。引き付け魅了するのは、人があなたのような具体的な存在を前にして《あなたは どうして そうなの？》《この方はどなたなのだろう？》と問うところだ。今、現在、あなたを見て問うのだ。

あなたはそのまま、自分の生き様でイエス・キリストを告げ知らせ、イエスを見せるのだ。パゾリーニが世俗的な立場から教育について言うように（ドン・ジュッサーニが引用した）《誰かがあなたを教育するというのは、その人の存在そのものに教育されるということであって、その説教によるものではないのである》（*Lettere luterane*, Einaudi, Torino 1976, p. 44）。キリストがわたしの人間性、わたしの現実
に立ち向かう方法を通して姿を現すこと。わたしが「彼」の生み出すものの証人であること。これが宣教だ。「彼」がわたしをこのようにつくったのだと、このようにさせたのだと、このように生み出したのだと。このように物事を見て立ち向かうようにしたのだと。父と同じ血筋の子であるのだと。

ある大学生が、自分の住んでいるアパートに労働者の若者が入ってきたと話してくれた。教会には出入りせず、仕事のために自分とは生活パターンがまったく違うと。寝るのがとても遅く、夕食の時間には全然いない。要するにその若者にとってアパートは単なる駐車場のようなものでしかないように思えた。ある日夕食に友人がやって来るまでは。その友人はアパートを見回しながら《いい所だね！》と驚いたように、そこに住んでいる彼が気づいていなかったことに注目する。すると労働者の若者が部屋から出て来て一彼が家にいたとは誰も知らなかったテーブルに着くと、その友達は彼と話し始めた。大学生はそのことは気に留めなかったが、次の日の朝、夕食に来た友人が電話をかけてきて《あの若者は本当に何かを求めているよ。君たちのうちに何かを見出したことは確かだ》というのに対して《いやー、そうは見えないね》と答えた。その同じ日の朝、大学生は川に遊びに行くことにし、あまり乗り気ではなかったけれど、労働者の若者に《一緒に行く？》と誘うと《行く、行く》と答えてきた。川に着いた時、労働者の若者はあのアパートに移り住むことが自分にとってどういうものかを話し始めた。

《君たちの間には何か違うものがあるとすぐに気づいたんだ》。そこに住んでいる者の多数が運動のメンバーだとは誰も言っていなかった。彼が入った部屋で、前の住人が置いて行った *La voce unica dell'ideale* 理想の唯一の声(San Paolo, 2018) という冊子を見つけて、《ぼくは全部読んで、一そして続けた一その後5年生になる弟にあげたよ。彼にはこのようなことが必要だから》。そして大学生に《君たちを知りたい》と言い《祈ることを教えて》と言った。大学生は《その前夜、夕食の終わりにみんなで祈ろうと言おうと思ったけど、彼（労働者の若者）がいたから、彼には祈ることなど興味ないだろうと思って言わないことにした。ぼくには客の友人がすぐに見出したものが見えていなかった。彼の開いたまなざしが自分をも覆ってくれて本当によかった》と締めくくった。

何と貧しい心が必要だろうか、最後にやって来た者に生み出されるには！この例でも分かるように、わたしたちがよく犯すリスクは何だろうか。分かり切っていること。何によって分かるのだろうか。わたしたちにはもはや驚きがないことから分かるのだ。驚くべきことが目の前にあっても、鼻の先にあっても気づかない。起こっている最中に、起こっていることに本当に気づかないのだ。目の前であっても、キリストがどこで勝利しているか見えないのだ。福音書に書かれているように初期に起こっていたことが今も起こるのだ。《さて、イエスがカファルナウムにお入りになると、百人隊長が近づいてきて、イエスに懇願した。「主よ、わたしの僕が中風でひどく苦しむ、家で寝込んでいます」。イエスが、「わたしが行っ

て癒やしてあげよう」と仰せになると、百人隊長は答えて言った、「主よ、わたしはあなたをわたしの屋根の下にお迎えできるような者ではありません。ただ、お言葉をください。そうすれば、わたしの僕は癒やされます。わたし自身、権威の下にあり、わたしの下にも兵士たちがいます。一人に『行け』と言えば行き、ほかの一人に『来い』と言えば来ます。また、僕に『これをしろ』と言えば、そのとおりにします」。イエスはこれを聞いて感心し、ついてきた人々に仰せになった、「あなた方によく言うておく。イスラエルの中でさえ、これほどの信仰を見たことがない。あなた方に言うておく。多くの人が東からも西から[地の果て、異邦人たち]も来て、天の国でアブラハム、イサク、ヤコブとともに宴会の席に着く。しかし、み国の子ら[すなわち、最初に呼ばれた人々]は外の闇に投げ出される。そこには嘆きと歯ぎしりがある」》(マタイ 8,5-12)。「彼」が罰として追いやるのではなく、「彼」を認めなかったことによって自分たち自身で枠の外に身を置いたのだ。百人隊長のように最後に来た者が認めて、子であり、イエスが誰よりも先に告知した者は認めなかったのだ。

これが悲劇なのだ。わたしたち《神の国の子たち》、「彼」と共に飲み食いし、キリスト者の共同体に参加したにもかかわらず、今起こっていることに気づくことができず、逆に最後にやって来た者が気づくのだ。よってキリストが歴史にもたらしている新しさを見逃している一過去においてではなく今一。わたしたちが“自分たちのこと”について言い合っている間に、まさに最後にやって来た者が新しさ認めるのだ。こうしてわたしたちは一般的なメンタリティに溺れ、規則に屈してしまう。ドン・ジュッサーニが何度も引用した教皇ヨハネ・パウロ一世が言われていたように、驚きが欠けて、規則や企てに負けてしまうのだ。《現代的だと自称することを好む教会[一般的なメンタリティに流されるキリスト者の問題]の本当の悲劇は、キリストの出来事による驚きを規則に置き換えようとする試みである》(Giovanni Paolo I, *Humilitas*, n. 3/2001, p. 10)。ドン・ジュッサーニは次のようにコメントしている。《驚きを取り除くと [もはや何にも驚くことなく、起こる最中に起こっていること、つまりあなたの顔を浮き彫りにするキリストの出来事を認めないこと] [...] 自分の細分化された人生・いのちが規則の奴隷として服従することを避けられない》(In *cammino*. 1992-1998, op. cit., pp. 107-108)

逆に《キリスト教の出来事は神聖一屈みこんでわたしたちの人生に入り込んだ神一との明らかな一致を伝える人間との出会いである。この出会いは自分自身について目を開かせ、自分自身の覆いを取り除き、自分自身に一致することを見せる。そこにあるものは自分が望んでいるものだとして理解させるから、自分が何者であるかに気づかせ、自分が何を望んでいるかが分かるようになる。[...] “見なさい [見なさい!] あなたが何であるか。そして、わたしがあなたに一致しないとでも言えるだろうか。自分を知らないから、わたしがあなたの心に一致しないと信じられるのだ。そして自己の意味として他のものを好むことができる” [つまり、わたしを失っていいか] とでも言っているかのようだ》(ibidem, pp. 111-112)。要するにドン・ジュッサーニは常にわたしたちを襲おうとする危険に対する警戒を呼び掛けるのだ。どんな危険だろうか。それは父から独立して自分を成長させることができるという思いだ。《時間が経つにつれて、危険は父に対して子が成長したいように成長することである。つまり、父から離れて自分の道を歩むこと》だ。こうして《子はもはや父の子ではなくなる。行動するために一時的に弟子となる [完璧な描写であることに注意。多くの場合わたしたちは“一時的に弟子”となる]。行動できる時には自分勝手にする [行動できる時には自分勝手にし、喜んで父を無視する]。[...] 逆に子が子であるなら、成長し父が教えたことに新しいことを従わせる》(Appunti dal Consiglio di presidenza di CL, Milano, 24 luglio 1992, conservati presso la Segreteria generale di CL, Milano)。

これは、今年度の始めに当たってわたしたちが目の当たりにしている挑発だ。わたしたちを生み出す存在、ニヒリズムに打ち勝つ権威、《この方はどなたなのだろう？》という問いを促すほど異例な存在をキャッチするよう張りつめて生きること。

教皇フランシスコは最近《神はわたしたちを愛している》《わたしたちが想像するよりも近い存在となり、わたしたちを救うためにわたしたちと同じ肉を取られた。この告知が信仰の核心であり、これがわたしたちのどのイニシアティブにも先行し、これに促進されるべきである。わたしたちはこの親近感を具体的にするために存在するのである。けれども、その経験なしでは、日常的に経験せずには神の接近を伝えることはできない…》と言われた。(Discorso ai Vescovi partecipanti al Corso di formazione promosso dalla Congregazione per i Vescovi e dalla Congregazione per le Chiese Orientali, 12 settembre 2019)

子になることによつてのみ、父性の経験をすることによつてのみ今日（現在）を支配する意味のなさに対する答えをわたしたちに出会う人々に伝え、互いに証しすることができるのだ。